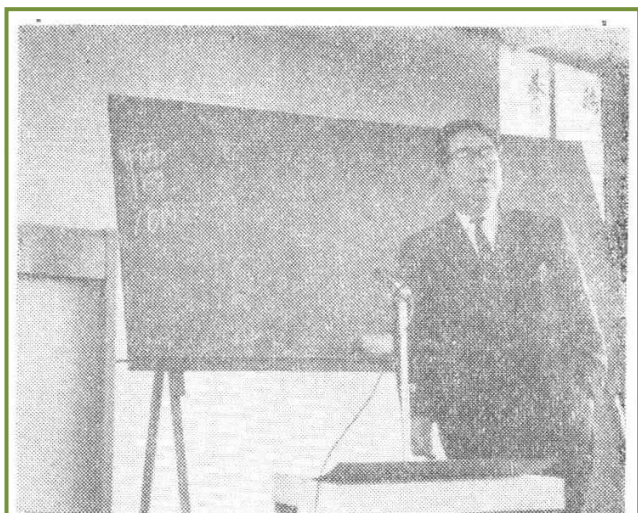


いかに卵価安を乗り切るか

養鶏経営の現状と問題点

中央畜産会畜産

コンサルタント指導職 木村唯一



2月25日農業会館で開かれた畜産講演会より抜粋

昨年来の卵価安、飼料高のなかで、養鶏は重要な問題をかかえています。生産が増加したため、皆さんが売られた卵はたしかに安かった。しかし、消費者の手元に入る卵は、大根や白菜の値上りに比べれば安かったが、そんなに安い卵、10円卵などというものはいまだかつて食っていない。この事実のなかにも問題がかくされていると思われま

す。従来、卵が安かったのは昭和30年、続いて33、36、39年と3年周期で繰り返しています。ところで、30年の次の31年には飼養羽数は減少している、34年にも減少して。しかし36年の次の37年にはどっこい減らなかった。なぜかといえば、以前の様な小規模養鶏では「安かった、止めた」でよかった、そして、生産減から卵価も回復しました。最近のように借金までしている1千羽、2千羽養鶏では止めるわけには行かない。また、1羽当りの儲けが少なくなれば数でこなそうとする者が多くなっている現状では、一度安くなると、どうしても低迷が永びくことは避けられない現象でありま

す。それでは、所得をいかにしてあげるかを、根本的に考えてみますと、

農業にたとえば、まず「反収」をあげる必要が

あります。即ち、鶏の能力をあげることです。

次に「単価」が上っても所得は増加します。

「面積」をふやす、規模を拡大してもよろしい。

さらに、「経営費」が少なくなっても所得は増えます。

あるいは、「農家数」が減っても分配所得は増加します。

1 いかにして能力をあげるか

所得をあげるために重要なことは、まずたくさん取ることです。いくら生産しても、卵を腐らしてしまったという事は一度もありません。しかし、経営と結びつかないものでは困ります。

そこで、反収をあげるためには大事な4つの要素があります。

環	品
境	(ヒナ)
管	種
理	エ
	サ

①ヒナに関する問題

従来の養鶏の所得割合を見ると、

養鶏……………88%

廃鶏……………8%

鶏糞……………4%

でありました。しかし、これからは廃鶏、鶏糞に所得を求めることはできず、どうしても卵にウェイトがかかります。ではいかにして卵の所得をあげるか？

よく皆さんは、産卵率のことをいわれます。だが、売るのは産卵数です。産卵数を支配するのは産卵率であろうが、もっと大切なのは生存率です。まず生存率を高め、そして産卵率をあげ、卵重を重くするのは。そのために重要なのは、ヒナの点です。

ヒナの素質で何が大切かという、大羽数化する現在では、強健性、抗病性、齋一性が重要です。しかし、苗半作という言葉はあっても苗全作という言

岡山畜産便り 1965.03

葉がないように、ヒナの良否は一つのファクターであって、全てではありません。

外国鶏も過信してはいけない

皆さん方も、大分外国鶏を飼っておられるでしょう。たしかに、外国鶏は丈夫です。しかし、外国鶏を導入したことによって、皆さん方の養鶏経営が今後も順調にゆくかという、そうではないといわざるを得ません。

雑誌でよくアメリカ鶏のランダムサンプルテストの成績を、ご覧になったことと思います。これは、全く完全な衛生管理のもとで行なわれたものです。ところが皆さんのうちの外国鶏は、鶏痘とコクシジュームの予防しかしていなかった、しかも成績がよかった、ならばアメリカの気象より岡山の気象が外国鶏に適しているのだと考えるのは、早計ではなからうか？過去の経験を思い出してみてください。白レグばかり飼っていて、どうもよくないのでロックホーンをいれた、どうやら満足できる成績がでたはずですが。ロックを続けていたら白血病がでて困るのでハンブホーンをいれた、やや小康を保ったはずですが。大根を連作していたらできが悪かったので人参を蒔いたらすごい人参がとれた、この畑の人参の適地であるとするのが誤りであるのと同じことです。日本鶏の連作のあとに外国鶏を入れたのですから、よいのがあたりまえです。外国鶏は強いが、万病に強い鶏はないのだから外国鶏を連作すれば外国鶏特有の病気が出るものと考えられます。

まず無病育すうから

ヒナの素質は大切ですが、素質を持っているだけでは丈夫に育ちません。丈夫に育てなければいけない。それには、器（うつわ）が完全であることが必要です。

それではどの程度の施設が必要かという、成鶏舎の40%の広さの育すう舎が必要です。ところが、一般の養鶏家の施設をみると、せいぜい20%のものしか持っていない。これでは、生存率は極めて低い、必ず病気がでること間違いありません。

そして、育すう舎はなるべく成鶏舎より分離することです。この理屈は解っていても、農家では実際にはむずかしいことです。ここに共同育すうの必要性がでてまいります。本を開いて、共同育すうの目

的をみるといろいろ書いてありますが、一番の目的は成鶏舎と離して、病気の汚染から防ぐことなのです。消毒といっても、成鶏舎の消毒など実際にできるものではないのだから、育すう期に徹底的に消毒して、無病のヒヨコを作る。これが生存率を高め、産卵率を高め、所得を高める所以であります。

②エサに関する問題

エサは何によって喰うのかという、次の4つによって喰います。

産卵率……10%……5.5g

体重……100g……2.0g

卵重……1g……1.0g

エサの質……

即ち、産卵率が10%高くなれば、エサを1日5.5g多く喰います。体重100gにつき2.0g、卵重1gにつき1.0g多く喰います。

産卵率については、1日5.5gよけいに喰われても産卵率10%増加のほうが有利です。しかし、体重が増加して採食量がふえることは経営上マイナスになる場合が多い。

卵重については産卵率20%以上の鶏では重い方が有利です。というのは、毎日卵をうめば1gのエサで、3日おき3g、4日おき4g、5日おき（産卵率20%）では5gのエサで1g重い卵を得たことになります。これが、経営上限界です。卵の値段がエサの値段の5倍以上でないと採算が合わない。つまり、卵1kgの値が、エサ5kgの値段以下では経営的に成り立ちません。5g以上も多くエサを喰わせて、1g重い卵を得たのでは得にならないのです。

エサの質はどうかという、養分総量TDNの問題になりますが、これがいかなる関係をもっているかを産卵鶏についていえば、エサ1kgにつき1円高くなれば産卵率が1%あがらないと採算があわない、2円値上りしても、そのエサを給与して産卵率が2%あがれば所得は同じだということです。

エサに関連して水の問題ですが、鶏は水を産卵率、環境という2つの条件で呑みます。夏季、下痢便をして困るから水を制限する、しかし、産卵率によって水を呑む量が違うということを念頭において、節水しないと失敗します。

岡山畜産便り 1965.03

特に、水の不足は産卵に影響します。給餌の時間を間違えた、忘れたとしてもそう影響はありませんが、水の不足は一週間にわたって産卵にひびいてきます。

③管理に関する問題

管理については「卵を産ませる」ということだけを考えていけばよろしい。鶏は卵を産む動物ではなく、産ませる動物だということです。

世の中に儲かる農業はないのです。あったらみんな飛びついて、大変なことになります。儲ける農業はあるのです。

同じ部落の同一気象条件のもとで、同じふ化場同じヒナを導入し、ケージ鶏舎も同じ、エサも同じもの、卵も共同出荷で同じ売値、しかも同じ規模でありながら、所得をみるとバラバラです。これは産ませようという気力の差が現われているのです。多羽数飼育すれば儲かるなんて考えは、とんでもないことです。所得につながる多羽数飼育でないとならないのです。産ませようという気力、実力に適した規模にすればよいのです。また、「産ませよう」ということだけ考えておれば、水をやり忘れることも、防寒防暑を、鶏舎を清潔にということも忘れないであります。

④環境に関する問題

- ①日光……………光線管理（彩光）
- ②空気……………換気
- ③水……………乾燥
- ④温度……………防寒防暑
- ⑤風……………体感温度

環境とは以上5つの項目が重要なファクターです。

光線管理とは、鶏は長日性動物であることに注目しろということです。日が長くなってくると性成熟をおこし、卵をうみます。日が短くなる秋には、うまなくなるのが普通であるのを、無理にうませるように改良したものです。だから、4～6月の産卵率は差があまりないが、うませ方の悪い人は、秋がきて大きく差が開くのです。

他の4つの環境条件は何によって決るかといえば、鶏の飼養密度に左右されます。とすれば、いかにし

たらよいか？皆さんのほうがよく御存知と思います。

2いかにして価格変動に対するか

①高く売れるものを作る

価格の点については、我々ではどうすることもできなく、安くなるものは安くなります。だから、我々はいかに高く売るかを考えなければなりません。

以前の農業は作る技術の段階であって、隣の農家より多く取ればよかったのですが、これからは隣の農家と協力しないといけません。なんとなれば、作る技術の段階から売る技術に、さらに買わせる技術の段階に移ったからです。良いものを安く作り、高く売る、即ち、作ったものを売るのではなく、高く売れるものを作る農業に変わったのです。

それでは良いものとは何かというと、現在のように市場が大型化すると、まず①規格の揃っているものを②大量に③計画的に、そして④継続的に出荷することなのです。さらに、鶏卵は8割が食膳で割られるものですから、清潔さが希望されます。洗浄機械もありますが、エグクリーンなどの薬剤を利用したほうが有利でしょう。これらを個人では行うことはできず、団地化の方向をたどるでしょう。しかし、団地化、組織化といっても実際に行うとなると、難しいものです。

なにをやるにも「適地適作」は大切です。しかし、これだけではありません。岡山県下の養鶏先進地をみても、立地条件がよかったのみならば、隣の部落でも同じことがいえます。内部リーダーがしっかりしていたから、統制力があつたからです。つまり、「適人適作」であることが必要です。さらに高く売れるための条件を色々申しましたが、それには「適資本適作」でないといけません。とすると、またしても組織化が必要になります。

このように、所得を高めるためには、高く売るようにする方法、組織で勝負する方法、また、高い時に多く生産する方法もあります。

それでは、地域差はどうなのか？これも、材料費、労賃などの差を都市近郊と山間部で比べてみた場合、総費用では殆んど差がなく、それより、購入及び販売時の数量の多少による費用の差の方が大きい状態

岡山畜産便り 1965.03

上式でもわかるように、産卵率を1%あげれば1年間に1羽が3.65個多く卵を産み、大体36円カバーできます。しかしながら、更新率が高くなれば卵が小さくなりますから、1.5%（外国鶏では2.0%）産卵率があがらないとカバーできません（卵重1gは産卵率1%と等しい）。

産卵率を3%高めたことにするには、現在の産卵率を維持しながら、更新率を20%さげればよろしい。そのためにはヒナを丈夫に育てることが大切です。

⑦7割の所得でがまんする

卵1kg10円の差は1羽当りにするといくらになるか？鶏1羽が年間12kgの卵を産むとすれば、年間120円の開きがでできます。

これを1日の開きになおすと、365羽飼っていると120円の差、1000羽で325円、2000羽で650円の開きがあります。

卵が1kg当り10円安くなれば、2000羽で2000円（1日1羽当り1円）の利益をあげていたときに比べて、1350円（2000-650）の利益しかあがらないこととなります。つまり、7割の所得でがまんすれば、これまたよいこととなります。

これら7項目は相対的なものですから、1項目でカバーすることが難しければ、組合せによって値下りを穴埋めすることができます。産卵率3%はむりでも1%あげることでできる、飼料要求率を0.1下げる、所得1割減はがまんする、これでも10円の値下りをカバーできます。

また、これは卵1kg10円、1羽当り年間120円という数字を基礎とした等しい数式でありますから、逆の場合も考えられます。産卵率が3%あがったら、卵重が2g下っても、飼料が1kg2円高くなっても所得は同じだということ、また120円高い外国ヒナを買ったら、産卵率が3%あがるか、卵重が2g重いか、丈夫で更新率を2割下げてもよければ、所得は同じであるのです。

規模拡大について簡単に述べますと、農業規模はよく、土地を底辺とし、資本と労力を他の二辺とする三角形の面積で表されます。規模を拡大するには土地を広くすればよろしいが、専業農家は少なくなっても兼業農家としてとどまる現状では、買うことも借りることも不可能です。そこで私は、土地では

なく、経営能力が基底であるべきと考えます。その「経営能力」に適合した「資本」と「技術」を積み重ねてゆくことが、規模拡大であろうと考えております。

経営費の点については、すでにいろいろ申し述べましたので、省略します。

3省力と機械化

省力は機械化から、というので、現在我国には181万台（3戸に1台）の耕耘機、テイラーが導入されています。なぜこんなに広まったかという、①良く、②速く、③楽に、この3つの理由からと思われる。そして、④経済的にということは忘れていません。

いま、一人で2000羽飼育している人が機械化して5000羽に増羽するとします。その数は2.5人の労力が必要なものですから、その差は1.5人。もし、一人年間労賃24万円（1ヵ月2万円）とすると、36万円の労賃分は機械化してもよいこととなります。

機械の償却期間を5年とすると年間の償還が20%、金利が10%（他に投資した場合を考えて）、燃料、修繕費が10%、即ち、年間40%の償還が必要になり、この40%を36万円で賄える範囲で機械化できるわけです。

$$36万 \div 0.4 = 90万$$

上式から求めた数字、90万円の機械を導入して5000羽に増羽してよいわけです。

しかし、機械化するには3つの条件があります。

①増羽した3000羽の鶏によって、機械化に必要な年間費用36万円より多くの利益が絶対にあがること。

②労賃の高低によって機械化の限界に相違がある。（労賃の安い地域では限界は小さく、高い地域では広がる）

③1羽当りの投資は250円が限界である。（1羽当りにして250円以上かかるならば、いくら労賃が高くとも、機械化による増羽は無理である）

しかし、機械化が労働生産を高めることのみに関係している場合はもっと簡単です。糞掃除に0.5人かかっていたものが、機械化によって0.1人でやれる場合、その労賃の差は9.6万円（ $24 \times 0.4 = 9.6$ ）

岡山畜産便り 1965.03

即ち、年間の償還金が 9.6 万円の機械を導入してよいこととなります。つまり、20 万円 ($9.6 \div 0.4 = 20$) の掃除機を導入してもよいことになって、条件付きでなくなるのです。